

明清代の『金剛經』解釈

「応無所住而生其心」解釈の変遷

岩 城 英 規

一、初めに―問題の所在―

『金剛般若經』は、中国・韓国・日本などの東アジア仏教圏において、『般若心経』に次いで人口に膾炙し、現在に至るまで広く誦誦されている經典であるが、鳩摩羅什の伝訳直後から一貫して持てはやされたのではなく、一般に「明代の『楞嚴經』、清代の『金剛經』」と言われるように、明代末期から清代にかけて流行し、仏教宗派さらには出家在家を問わず、多数の注釈書が著された。これらの注釈書については、各人が經典に託して、自らの見解を披瀝したものが大半であるという説明で一くくりにまとめられているが、それ以上の詳細な研究は、現在のところ皆無に近い。そこで本稿では、この点を問題の所在とし、上記の見解を一步深めることを目標とする。具体的には、古来、八百余家に上るとされる『金剛經』注釈書の内、明清代の注釈書を中心に、本經の最重要句とされてきた「応無所住而生其心」（大八一七四九下）の注

釈を比較検討することにより、解釈の特徴・傾向・思想的変遷などを時代別に提示して、上記の問題に対する解答としたい。

二、明代以前の注釈書の解釈

「応無所住而生其心」にまとまった注釈がなされるのは、八世紀末から九世紀初頭ごろに神会派内で編まれた『金剛經解義』が最初であるが、本稿では、この事実を指摘するに止め、宗密・子璿らの注釈書から見ていくことにする。『金剛般若經疏論纂要』は、唐代の圭峯宗密（七八〇―八四二）が、羅什訳『金剛經』について、諸家の説を採集総合した上で自らの注釈を著したものであり、『纂要刊定記』は、宋代の長水子璿（？―一〇三八）が、宗密の『纂要』を敷衍する形で著したものである。明代には、両者を合会した『金剛經疏記科会』（統蔵一・三九）が著され、広く用いられた。これに対し、清代の寂暲が両者の解釈を踏まえて『金剛經演古』（統蔵一・四〇）一卷を著した。これら三者を詳細に検討すると、解釈の力点

に明らかなる相異が見られる。三者の注釈（『科会』四二八左下～四二九右上、『演古』五二左上～左下）を見ると、『纂要』では「而生其心」の説明として、「正智」と「真心」を併記している。これに対し、『刊定記』の注釈は、「正智」と「真心」の両者を共に説明するが、『纂要』にある「空見」に陥らないために「真心」を生じさせるという解説や、「天真之心」の説明から、「正智」に比べ「真心」に重きを置いていることがわかる。次に『刊定記』は、色などに執着させないことが有を遮することであり、その後心を生じさせるのは無を遮することであるとし、有無を離れているので中道であり、このように了解するのが「真の莊嚴」であるとしている。これら『纂要』と『刊定記』の説明に対し、『演古』では「而生其心」の説明として『纂要』の文を用いるが、『纂要』の「則是正智」を省いたり、「正智」を「真心」に変えて引用するなどしている。また、執着するものがなければ十方世界はただ一心のみであり、このことを了悟することが「真の莊嚴」であるとしている。以上の三つの注釈書の例から、唐代の『纂要』においては「真心」と同じ位置にあった「正智」が、宋代の『刊定記』においてはその地位を低下させ、「真心」による説明が増加しており、それが清代の『演古』に至ると、「真心」のみで全てを説明していることがわかる。以上のことから、唐代から宋代さらには清代と時代が下るに従って、

この句の解釈が、真心＝自性清浄心に基づく唯心主義へ単純化されていくという大まかな傾向が看取される。

三、明代の注釈書の解釈

続いて、明代の注釈書の中で思想的に重要と思われるものについて、その解釈を検討する。明代初期の代表的な注釈書として『金剛經註解』（統藏一・三八）が挙げられる。本書は、洪蓮が太祖洪武帝の命を奉じ、羅什訳『金剛經』に関する五十三家の注釈書について、編者が適切と思われる注釈の精要を抜粋・編集したもので、『金剛經五十三家註』の別名でも知られている。この中には現存しない注釈書も散見され、当時行われていた『金剛經』注釈の精細な解明に不可欠なものである。『金剛經註解』における「心無所住而生其心」の注釈（四四四左上～四四五右上）には、『疏鈔』・王日休・陳雄・李文会・傅大士・川禅師という六家のものを載せているが、このうち前四者は佚書である。最初の『疏鈔』はこの句を注釈するに当たり、「清浄」の面を強調せず、『首楞嚴經』の句（六一九一一二下）を引用しており、この句は、一切の衆生は眞実の自己を見失い、本心を失って外物に引き回されているが、この外物の支配から脱却できれば、如来と一体になり、身心ともに円満澄明になるという意味である。この中の「物を転ずる」とは、自己が主体性を確立して外物を自由に操作

すること、『首楞嚴經』の重要句の一つであり、この個所の注釈なども検討すると、「応無所住而生其心」を『首楞嚴經』の重要句に同置して理解していることがわかる。次に、王日休は『龍舒浄土文』の著で知られ、浄土にことよせた注釈を加えている。陳雄の注釈では、六祖慧能が、「応無所住而生其心」の句を聞いて大悟した故事を述べ、『六祖壇經』「行由第二」の文（大四八―三四八上、三四九上）を載せているが、これは現存の注釈書において、この句の説明に『六祖壇經』を引用した最初期のものであることが注目される。李文会の注釈では、有所住心：妄念⇩無所住心：智慧、という対照を考えており、これは「妄念」と「真智」という対比を考えた『金剛經解義』の解釈を受けたものである。次の「傳大士頌」とは「梁朝傳大士頌金剛經」のことで、『金剛經』三十二分の文意を「弥勒頌曰」として、五字一句の偈頌としたもので、梁の傳大士を弥勒の分身とし、彼が梁武帝のために作った偈頌を弥勒に仮託したものと考えられる。最後の「川禅師頌」とは、道川の『金剛經註』のことであり、「清浄・清浄心」を強調した解釈をしている。以上の諸注釈を総括すると、明代初期の段階は、「応無所住而生其心」の説明については、『首楞嚴經』や浄土教の立場からの解釈が『六祖壇經』の故事を中心とする禅宗的解釈と併存しており、各注釈者の様々な思索の跡が窺える思想的発展期と見なすことができる。

『金剛經宗通』（統蔵一・三九）は、明代の曾鳳儀が、子瑤の『判定記』などを基本とし、主に禅関係の説明を参照して著したものである。本書の注釈（二四右上・右下）を見ると、『判定記』に基づき、心の性格を「無住」と「清浄」と規定している。そして『六祖壇經』の故事を載せた後、南岳懷讓禅師の、「一切の法はみな心から生ずる。」という語（古尊宿語録）卷一、統蔵二・二三、七九左下）を引用し、慧能が得た「無住生心」の語は、懷讓の心に受け継がれていると述べている。

このことから、宋代の注釈書に始まった「真心」化傾向は、明代の禅宗系統の注釈書において一貫して強化され、『六祖壇經』の故事を起源とし、後代の禅僧の語録と会通させることによって、「而生其心」の「心」を一切法を生み出す根源とする唯心主義の解釈にまで展開していくことが看取される。『金剛經鑑』（統蔵一・三九）は、明代の広伸が、宗密の『纂要』を基本とし、世親の『能断金剛經頌論釈』や他の経論および禅宗の語録などを参照・引用して解釈したものである。

本書の注釈（八二右上・右下）を見ると、「応無所住而生其心」の「心」を、「本有無住の真心」とし、有にも空にも住著しないことにより「本有の真性」を顕現させ、その心を生ずるべきであると説明している。これは禅宗系統の理解であるが、本書では、その「真心」を「本有」と規定し、「無所住著」によって「本有之真性」を顕現させるとするなど、「真心」を、

有り存在する物として理解しており、このことは「本有の真性」という語に明確に現われている。このように、「真心」・「真性」の有的解釈をする点が、本書の特徴である。また本書は、「応無所住而生其心」の句が『金剛經』の要旨であると述べている。このことから、『六祖壇經』の故事の引用に始まった「応無所住而生其心」重視の傾向が、明代に至つてほぼ完成したと考えられる。

『金剛經筆記』（統蔵一・三九）は明代の如觀が著したのである。本書の注釈（二二三右下／＼左下）を見ると、「六塵に住著して心を生ずるべきではない」という個所における注釈では、「境は心に由つて生じ、心は境に従つて生ずるものである。」と述べ、心の外に法はなく、法の外に心が無いことを了知すれば、あらゆるものは「菩提の妙淨明体」となり、心と境は不二であり、体と用は一如であるとして、『楞嚴經』（六一九―二四下）を引用しており、これを經証として唯心主義的に理解していることがわかる。次に本書の特徴は、「無住」を「体」、「生心」を「用」ととらえ、上記の「体用一如」から、この両者が一つになる境地が望ましいと説明する点である。さらに、終南山雲際師祖禪師の故事（『古尊宿語録』卷二十四、統蔵二・二三、二三六右下）を引用し、如来藏自性清淨心を説いている。この故事も、後代の『金剛經』注釈書にしばしば引用されることとなったものであり、唯心・自性清淨心にこ

とよせた解釈が主流を占めるようになったことが看取される。

『金剛經破空論』（統蔵一・三九）は、明末四大名家の一人である藕益智旭が崇禎十三（一六四〇）年に、天台教義と八不中道義に基づいて解釈したものである。本書の注釈（二三九右上下）を見ると、六祖慧能の故事に触れることは、他の注釈書と同様であるが、「無住」と「生心」の解釈について、同時代の注釈書とは際立つた相異を見せている。すなわち、禅宗系統の注釈書が、「生心」の「心」を、一様に「清淨心」や「真心」などと解釈するのに対し、本書では、「無住」とは「諸々の有為相に住著しないこと」であり、生死・涅槃・（有無の）二辺・中道などに執着しないこととし、「生心」とは「六度万行の心を生ずること」であり、上求の心・下化の心・折伏の心・授受の心を生じ、法界に遍滿し、三際を窮めることと解釈している。さらに、天台教学を自らの基礎学とした智旭らしく、「無住」と「生心」の関係について、四教や六即用を用いて説明している点などから、禅が主流を占めた当時の仏教界に抗し、「教禪一致」を主張し、「教」に重点を置いた解釈を施した智旭の立場が良く現れていると考えられる。

四、清代の注釈書の解釈

続いて清代の注釈書を検討する。この時代の注釈書は、自らの見解を披瀝したものが多く、そのほとんどが明代まで

の禅宗系統の注釈書に基づいており、様々な解釈がある明代の注釈書に対して、説明の定型化が進み、思想的な展開はあまり見られない。その中で、特色のある注釈を二例挙げる。

『金剛經註釈』(統蔵一・四〇)は、注釈者の雲峰溥仁(？—一六九一—?)に対し、訂者の子真などが『金剛經』の講義を乞い、雲峰が四十日を要して説明したものが基になっている。本書は、梁の昭明太子作の三十二分法に基づき、「子真説」あるいは「雲峰説」として、この両者が注釈をしている。

子真は、字句の説明など經典の容易な事柄について、一般的立場から説明しており、これに対し雲峰は、思想的解釈など經典の本質的事柄について、禅宗の立場から注釈をしている。本書の注釈(二九右上と左下)を見ると、この部分最初の「子真説」の個所と「如来説。『無所住而生其心』」の個所において、『金剛經註正訛』(統蔵一・三九)を引用している。この書は、長水の仲之屏が經典の字句を、他の経論や注釈書に依らず独自に説明したものである。『金剛經註釈』の特徴は、「応無所住而生其心」の注釈について、「如来が辛丑(清・聖祖、康熙六十一(一七二二)年)四月十五日に降壇して説法し、雲峰がその大旨を訳解したものである。」と述べ、自説ではなく如来の直説としており、またその前の「不応住色生心、不応住声香味触法生心」の注釈について、「如来の旨は阿難行者に留め、再びこの句の経義を發明する。」と述べ、世尊

の旨を阿難が承けて説くとしている点である。本書は、辛丑二月十九日から四月九日にかけて講義され、如来が降壇して説法したとする辛丑四月十五日は、雲峰の講義が終わった後である。ただし、如来の説法の内容を検討すると、前半部分は『金剛經註正訛』の注釈を引用したものであることから、雲峰が、「応無所住而生其心」の句を如来の直説とすることにより、これ以前の注釈書が説く「一經の要旨」という地位を、さらに向上させ神聖化させる意図に拠るものであることがわかる。

『金剛新眼疏經偈合釈』(統蔵一・三九)は、清代の通理(？—一七六五—?)が、諸家の説を随意に取捨して前後承応させたもので、これにより「新眼」と名づけている。本書の注釈(二六六右下)を見ると、「而生其心」の「心」を「清淨心」とする諸書の説明から一步踏み込み、清淨心とは「覚心」のことであるとして、この覚心が常住であるという注釈を施している。「覚心||悟った心」とは「真心」を主体の側から見たもので、清淨心から「覚心||悟った心」へという理解の展開が看取され、「悟った心||完成した心」という意味から、真心説の一つの帰結と考えられる。

五、結論

以上の諸注釈書の分析により得られた「応無所住而生其心」

解釈の変遷を提示して、結論とする。この句にまとまった注釈がなされるのは『金剛経解義』が最初であり、宗密の『纂要』なども一定の注釈を著しており、唐代が「解釈の黎明期」と考えられる。その後、宋代初期は、子璿の『纂要判定記』や道川の『金剛経註』が著され、この句の「心」を「真心・清浄心」と解釈する端緒が開かれたことにより、「真心||自性清浄心説の開始期」と考えられる。

このような思想的背景を踏まえ、宋代後期から明代初期は、禅宗系統の注釈書を中心に、『六祖壇経』の故事を引用して「真心・清浄心」説を強化した解釈と、『首楞嚴経』や『円覚経』の重要句を用いたり、浄土教の立場から説明するなどの様々な解釈が併存しており、これらの点から「真心||自性清浄心説の地位向上期」、および各注釈者が自由に思索を重ねた「思想的発展期」と考えられる。

続く明代は、「心無所住而生其心」を『金剛経』の要旨とする説明に端的に見られるように、宋代の禅宗系統の注釈書に始まるこの句の重視傾向が一貫して拡張強化され、この句を後代の禅僧の語録と会通させて解釈する「真心||自性清浄心説の完成期」であり、「而生其心」の「心」が一切法を生み出す元であるとする「唯心的解釈への発展期」と考えられる。ただ、これ以外にも、当時流行していた『首楞嚴経』を経証として用いたり、天台教学を用いて説明するなど、「教

に重点を置いた注釈も散見され、この点からは、「思想的繁栄期」とも考えられる。

最後に清代の注釈書は、各人が經典に託して自らの見解を披瀝したものが大半であるが、これらのほとんどは、明代までの禅宗系統の注釈書に基づき、説明の定型化が進んでおり、思想的な展開はあまり見られない。その中で、「真心」を主体の側から見た「覚心」とする真心説の一つの帰結や、「心無所住而生其心」の注釈を「如来の直説」とすることにより、これ以前の注釈書が説く「一経の要旨」という地位を、さらに向上させ神聖化させたものなどが注目される。よって清代は、「真心説の成熟期」・「唯心的解釈の完成期」・「注釈の神格化期」などと言うことができる。

以上より、「心無所住而生其心」の解釈は、唐代に始まり、宋代を通して徐々に優勢になり、明代にほぼ完成し、清代に爛熟すると言うことができ、この句の「心」は、時代が下るに従って、真智↓真心↓自性清浄心↓覚心と変遷を遂げ、全体として、真心||自性清浄心一元論という唯心主義へ単純化されていく傾向を看取できると考えられる。

〈キーワード〉 金剛経、心無所住而生其心、真心、清浄心

(東方研究会研究員)